



若い世代に、 難民問題や平和を 伝える活動

パレスチナ子どものキャンペーンでは、小中学校、高校や大学で出前授業を行っています。若い世代の人たちに、世界の難民の置かれた状況やパレスチナの子ども達のことを知ってもらい、平和について考え、日本にいる私たちができることについても考える機会を作っています。

クリスマスにパレスチナ刺繍販売で 難民支援を！

2017年夏に当会事務局長の話聞いた東京の私立女子校の中高生のなかから、自分たちで何か行動を起こしたいと、高校2年生のMさんが先輩とともに事務所に相談にきてくれました。クリスマス行事が多いキリスト教系の学校の特徴を活かして、パレスチナのことを知ってもらおうと、先生たちを巻き込んでの準備が始まりました。

12月に入ると全校生徒に寸劇で呼びかけ、現地の状況や最近のエルサレム問題などの時事ネタも取り混ぜて映像やパネルを使って発表。数回にわけてパレスチナ刺繍の雑貨や小物の販売を行いました。生徒のご家族や先生方にもご協力いただき26万円以上を売り上げました。中高生には買える物が限られますが、「中学1年生が純粋に関心を持ってくれたのが嬉しかった」とMさん。

期間中はメッセージボードを作って英語の寄せ書きを集めたり、2012年から交流を持つ東日本大震災の被災地の方々に、パレスチナ刺繍のクリスマスカードを送る活動もしました。

今回は17人の生徒が中心となり実現した取り組みでしたが、一度きりで終わらせたくない、早速次につなげるための模索が始まっています。



修学旅行でNPO訪問

修学旅行や総合学習の授業でNPO訪問をしている中高生の受け入れも行っています。

毎年、四国の商業高校から2年生5～6人が東京の事務所を訪ね、難民問題やパレスチナの文化について学習し、平和や社会貢献について一緒に考える時間を共有しています。一昨年はパレスチナ刺繍の販売やワークショップなどの取り組みを紹介し、高校生だったらどんなことができるか、ぜひ考えてほしいという宿題を持ち帰ってもらいました。

今年度も11月に後輩グループが来訪、前年に訪問した先輩から役立ててほしいと寄付を預かってきてくれました。文化祭にはフェアトレードや地産の食材でドーナッツやアイスクリームなどを作って販売し、その利益を訪問したNPOに還元したいと、届けてくれたのです。日頃の関心は様々ですが、同じ世代の子ども達の状況を知ることで、日本にい



る私たちにできることは何だろうと真剣に考えてくれているのです。

同じ世代の子どもに 思いを馳せる

シリア難民の置かれた状況や当会の活動を知り、遠く離れた日本で生きる自分たちにできることを考えたい、との思いでやってきたのは別の私立中学の3年生10人。世界には難民が数え切れないほどいること、1日に1食しか食事を摂れない難民が沢山いるという事実に加え、映像の中で「明日あさってを生きることしか考えられない」「冬が寒くて燃料が足りない」といった声が心に強く響いたようでした。

当会の活動を紹介した中で、「現地の子どもたちはどのような悩みを持っているのか」という質問がありました。シリアで父親を失った経験がトラウマとなった女の子や、避難先の学校に適應できず家に引きこもっている女の子を紹介すると、「自分と同じぐらいの女の子が『死にたい』って心から思っているのに、すごくびっくりしました」と言う反応がありました。

「支援活動でやりがいを感じる時は？」という質問もありました。活動のなかで支援してきた子どもたちが成長し、大人になって私たちの活動に参加してくれる人もいることが本当に嬉しいと伝えると、「私は心の底から幸せって思うことが中々ありません。マラソンを完走できた難民の女の子が『幸せだ』と心から言っていました。こんな風感じて



くれる子がいるのは、支援する人たちにもすごく嬉しいだろうと想像できました」というコメントもありました。

訪問時には、簡単なボランティア体験もしてもらいました。みんなで試行錯誤しながら生き生きと取り組む姿から、こうした作業が支援に繋がっていくことに気づき、自分たちにもできることはあるのだと実感してもらえたようです。“大変そう”“苦しんでいる人たち”という難民イメージが、「自分たちと同じような人たちで、支援で状況を変えることができるんだ」と変わったようです。

料理と刺繍の講習会

ご支援いただいている生協の組合員さんが主催する会にも、パレスチナの料理や刺繍を持って出前をしています。調理の実習や実際の刺繍作業のほか、パレスチナの状況や支援活動についての報告もします。支援者の皆さんのところにもうかがうことができますので、ご相談ください。